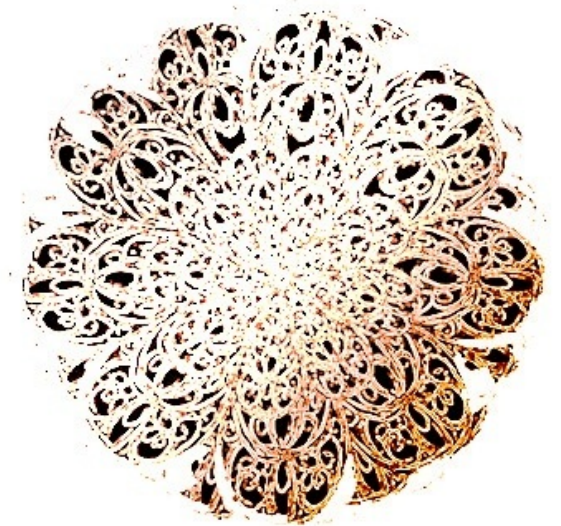


# 詩人のはなし

～ The tale of a Leanan-Sidhe ～

+

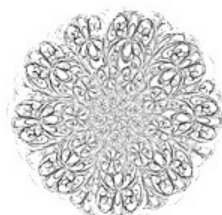
発行物目録&お試しサンプル



片足靴屋/Sheagh sidhe 2013/05/05現在

# 詩人のはなし

～ The tale of a Leanan-Sidhe ～



片足靴屋/Sheagh sidhe

by

SAKIIA HAENO

その街の印象は灰色だった。

透きとおっているわけでもなく、霞んでいるわけでもない。曇っているわけでもなく、ぼやけているわけでもない。透明度はひどく高く、彩度だけがひどく低い。そんな灰色が、晴れていても曇っていても、その街を覆っていた。

私とその街を訪れたのは、春のはじまる、薄ぼんやりとした日のことだ。その街で仕事を見つけたから、その街に住んだ方が何かと都合がいいだろうと思っただけだ。ただ単に、それだけの理由だった。だから、私は手頃な物件を求めて不動産屋の扉を叩き、こちらの条件を並べ、独身男性の住居に適した部屋の候補を挙げてもらった。そして、では内覧を、という流れになり、私はとある物件に赴くこととなった。

車の助手席から、私は流れてゆく街並みを見る。ハンドルを握る不動産屋は、中年で、小太りな、青灰の目を持つ男だった。

この街に住んでしばらく経った今だから言えることだが、不動産屋の目に凝っていた色は、街を包みこむ彩りそのものだった。街にとって、海は近い位置にあったが、波音が聞かれるほどではなかった。時折、湿った風が潮の香を運んでくるが、街にとって、海とはその程度のものであった。それでも、天候に関係なく、街を覆う色彩が薄ぼんやりとしているのは、多分に海の影響ではあった。大気の中を歩いているにもかかわらず、水の底を泳いでいるかのように錯覚させるだけの潤いと色彩を、海は街にもたらしていた。

物件を探していたその日、空は雲ひとつなく晴れていた。そこには、陽の気まぐれによって緑や橙がゆらぐ、猫の目めいた青灰が滲んでいた。滴り落ちてきそうな空は、それこそ、

巨人の腕をもって支えてもらわねば、地に崩れてきてしまいそうだった。

カーブをやりすぎすために、不動産屋はハンドルを切る。

「これから見に行くのは、いい物件ですよ。大家は気さくだし、近くにいいパブもある」  
不動産屋のことは正しかった。鍵を持参してきた大家は白髪の老人で、骨格という緻密な格子を服でくんでくるかのような矮躯を、溢れんばかりの温厚さで包んでいた。佇んでいるだけで穏やかさを広めてゆくその老人は、奢つたところのない、親しみやすいひとだった。

大家と不動産屋は飲み友達でもあるらしく、仕事相手というよりは遊び仲間めいた雰囲気では進んでいった。私たちは挨拶と打ち合わせを済ませると、二階の物件に足を運んだ。案内された部屋は、キッチンなどの水回りの向こうに寝室とリビングのある、私には充分すぎるほどの部屋だった。

内覧を済ませ、大家がドアに鍵をかけていると、ひとりの青年が階段をのぼってきた。しっかりと地を踏みしめているにもかかわらず、なぜか、ゆらりとした足取りで、地の底から這い上がってくるようだった。

それは、私と同じほどの年齢の青年だった。長身で、細身の、白にちかい半端な長さの金髪を無造作に束ねた、シャツとジーンズというラフな服装とはちぐはぐな印象の革靴を提げた青年だった。青とも緑ともつかない彩りの目が、その視線が、宙を彷徨っている。青年の眼は、焦点を結んでいないわけではない。にもかかわらず、亡羊としているように

にも、確信に満ちているようにも見えた。

私たちの傍らを通る際、青年は微笑をたゆたわせ、優雅に会釈をしてみせた。完璧なる被造物はかくやという造形に、私は息を呑んだ。理想を模した大理石の彫像が、ほのかな熱と、ささやかな息遣いをもって、筋繊維を駆使し、稼動している。たとえばベルニーニの彫像が、月桂樹に変じゆくダフネに追い継るアポロンが、私の目にその瞬間を灼きつけたとしたら、その残像は青年のそれと違和感なく雑じりあうに違いない。その肌には、蠟のやわらかさと大理石の透明が、繊細さとすべらかさが、生々しく、白々しく、冷ややかに、あでやかに、宿っていた。

隣の部屋の扉の前で、青年は立ちどまった。そして、鞆から鍵を取り出し、ドアをあけ、その中に姿を消す。

私の眼を追ってか、大家が声をかけてくれた。

「隣に住んでるあの人は詩人でね。有名だから、あなたも名前くらいは聞いたことがあるんじゃないかな」

そうして告げられた名は、さして文芸に興味のない私ですら、聞き覚えがあるものだった。それほどまでに有名な詩人であったから、もつと齢を重ねているものと思っていたが、蓋をあけてみれば、同年代であるようだ。胸をよぎった感情は、羨望か嫉妬か、判然としないものだった。まったくの違う領域で名を馳せている相手にそのようなものを抱くとは、尊敬でもすればいいものを、と、我ながら呆れてしまう。

だが。

「やつれてましたね」

それは、率直な感想だった。風貌そのものについてではない。青年から抱いた印象、そのものについての感想だ。

不動産屋が、意外そのもの、といった顔をする。その傍らで、大家が目を眇めた。

わずかな沈黙の後に、大家は唇を持ち上げる。

「あの詩人は、妖精に魅入られているのかもしれないね」



この街は鮮やかさを欠いていた。

僕は、この街を、けなしているわけではない。海に近く、潤いにくすんだ、透きとおった色にまどろむこの街は、僕が生まれ育った街によく似ている。海を隔てたところにある故郷とこの街はあまりにも似ているから、街を歩いていると、初めて出会った景色であっても、郷愁めいたものを抱いてしまうくらいだった。

ただ、故郷と同じように、この街には鮮烈さが足りない。

道を歩いていると、時折、ほのかな生臭さに漠然と胸がざわつく。近く嵐がくるだろうという不安が、本能として、首をもたげる。常にというほどでもなく漫然と、風は海の欠片を

運び、それを嗅ぐ度に、幻聴たる潮騒が湧いた。海の欠片が掻き立てるぐらつくような不安定さを僕は愛していたし、目にすることはなくとも恩恵を受け、潜ることはなくとも共に斃れる。共生であり寄生でもある、おぞましくうつろいやすい妄執が、この街と海の間にはあった。

革靴を抱えて階段をのぼっていくと、矮躯の老人と小太りな中年男性と、同世代であろう、ひっそりとした竹まいの青年と擦れ違った。老人が大家であることはすぐに判った。中年男性が不動産屋であることも、階段をのぼっていく間に思い出した。もうひとりとは、見覚えがない。隣の部屋の新しい住人だろうか。

疑問を抱いたまま、詮索するようなことでもなかったので、僕は三人に会釈をし、無難に傍らを通り過ぎた。

自宅の鍵をあけ、部屋に入る。キッチンを通り抜け、ソファとテーブルの区画以外は積み重なった書物でいっぱいになりビングの床を踏む。ソファの横となり、今の僕の正面にある窓は閉まっていたが、寝室の窓は開いている。蜜のように優しい、棘を孕んだ風が、頬を撫でた。

靴をソファに投げ捨て、僕は寝室へと足を向けた。

街も、部屋も、翳っている。街路樹も、人も、翳っている。空も、海も、灰色だ。

「ただいま」

半開きだった寝室のドアを、そっと、押し開ける。

「ごめん、遅くなった。打ち合わせが長引いてね」

ふわりと、薄い影を重ねるレースのカーテンが、潮風を孕んでひるがえった。

「そう怒らないでくれよ、これでも急いだんだ」

寝室に溢れる薄闇は、ひどく優しい。

一歩、ベッドに近づくと、そこには彼女がいる。

ベッドに近づくと僕を見上げながら、彼女は不機嫌そうに頬を膨らませた。シーツの皺に埋もれるように横たわる彼女の爪先が、僕の太腿を蹴る。僕は苦笑した。

「何を拗ねているんだい？」

靴を脱ぎながら、彼女を窺う。彼女は膝を抱き寄せ、ちいさく丸まった。花の香が鼻腔をくすぐる。乳と蜜をかためたかのような白い肌が、薄闇に浮く。やわらかく、かぐわしく、弾けるような肉が、可憐な女のかたちをもって、僕を見つめていた。きつと、彼女の肉は、あまのだろう。鮮やかさの欠けた景色の中で、唯一、淡くひかるのだから。

問いかけるような目が、僕を映している。

「決まってるじゃないか」

この灰色の街において、彼女だけが生彩を撒いている。

僕がベッドにとびこむと、丸まったままの彼女はボールのように弾んだ。スプリングの軋みが聞こえなくなる頃には、僕の耳もとで、彼女はくすぐすと笑っている。しなやかな背中を抱き寄せると、彼女の手が、僕の頬を挟んだ。砂糖菓子をねだるような目で、彼女は僕



を見つめてくる。だから、僕は、彼女の欲しがらぬお菓子をあげた。

「僕は、君を、愛しているよ」

彼女の唇はやわらかく、心地よい倦怠はまどろみの底へと僕をひきずりおろす。

\*

ぼやけた視界の中で、エニシダの錘が回る。ごわごわした塊から指先が繊維を導き、糸を縊り、回転する軸が、それを細く縊り、糸として紡がれたものを巻き取っていく。

目に見えるものは次第に輪郭を鋭くし、それにつれて僕の意識もクリアになっていった。それは、うたたねの底からひきあげられるかのような、泥を掻き分けて大気を求めたかのような、思考における倦怠感を伴うものだった。

あらためて手許に眼を移すと、糸を紡ぐ指が見えた。荒れていて、皮が厚く、細い。僕の指も似たようなものではあるが、これは、どこからどう見ても女の指だ。

僕は困惑する。指先は糸を紡ぎ続ける。

足もとを見おろすと、褪せた色の服を纏うまるみを帯びた肉が――なだらかに膨らんだ胸と、椅子に座る脚を覆うスカートが――ささくれた板張りの床に影を落としていた。これは、どこからどう見ても女の身体だ。

僕は混乱する。指先は平然と糸を紡ぎ続ける。僕は息を整えようとしたが、そもそも、

女は息を乱してなどいなかった。

感覚と思考の、精神と肉体の齟齬に、脳が掻き筆られたようなぐらつきを覚える。混乱が高じて興奮を連れてきたのか、困惑が高じて苛立ちを導いたのか、それすら判然としない。ただ、吐き気とは違う、それでも、悪心としか言いようのない、きもちのわるさが僕を襲う。ためしに眉間に皺を寄せようとしたが、女の身体が僕の仕草をなぞることはなかった。

音は聞こえる、匂いはない。糸を紡ぐ指先の、毛糸をつまんでいる感触もない。

僕の意思をもって女の身体を動かすことはできないが、その代わり、女の見ているものをそのまま、僕は目にしていった。

縫れた褐色の髪が、女の肩口から零れ落ちる。

ここでも景色は鈍色だ。

最も大きな家具であるテーブル全体を照らすのに手燭の炎で事足りる小さな家も、すべらかな木目の椅子などひとつもない粗末な小屋も、四隅に夜を残した屋根に葺かれた萱の裏も、すべてが翳っていた。

板戸が開く。女の眼が、指先から離れる。板戸から男が家に入ってくると、女は微笑んだようだった。

「おかえりなさい。漁はどうだった？」

無邪気な問いに、男はちいさな箱をテーブルに置いた。それは、紅い宝石が嵌めこまれ

た、藻に埋もれていてすら精緻な彫りをうかがわせる、輝きを帯びた小箱だった。

女が出迎えたのは、ひどく、無愛想な男だった。大柄で、筋骨逞しく、陽に焼けた肌をした、荒々しさを寡黙さで包んだ男だった。それが男の常であるのだろうか。何事もなかったかのように、女は首を傾げる。

「これは？」

「網にかかった」

男を見上げ、女は目をしばたたく。男は女に背を向けた。そのまま、奥の部屋へと歩いていく。寝室だろうか。

「最近、不漁続きだったからな。持って行くところに持っていけば、いくらかの金になるはずだ」

歩を進める男の背に、女は声を投げた。

「この前、司祭さまに、家に憑いていたわるいものを追い払ってもらったでしょう。だから、あの時の御礼として、その箱は教会におさめたらどうかしら」

男の歩が停まった。男は息を詰めたようだった。それとも、女の純真すぎる提案に、呆れているのか。

「わたしなら大丈夫よ。あなたがいれば、しあわせだもの。あなたの妻であることが、わたし、とても嬉しいの」

無垢でしかない微笑みが、可憐に、きらきらしく、女を彩った。

男が寝室に姿を消すと、女はふたたび糸を紡ぎ始めた。

女がしばらく錘を回していると、女のものでも男のものでもない、声が出た。

「ねえ」

少年のような、やや高い、純朴な声だ。

「ここから出してよ」

女の手が停まった。その指先から垂れた錘は、回転の残滓に踊っている。

「蓋をあけてくれるだけでいいんだ。簡単なことだろう？」

女の眼が、一点に定まる。声は、小箱の中から聞こえてきていた。

「ぼくを助けてよ。暗くて窮屈で、ここは、なんだかとてもこわいんだ。前に君は、ぼくのことを好きだといってくれたじゃないか」

懇願を、哀願を、愚直なまでの素直さをもって、声は言い募る。小刻みに、女の歯の根が鳴った。

なんてきらびやかな小箱なのか。灰色の世界において、唯一、鮮やかに輝いている。

私の感嘆をよそに、女は髪を振り乱し、両手で耳を塞いだ。

明らかに取り乱している。女が撒き散らしているのは、怖れと、罪悪感と、後悔、だろうか。この声の持ち主を、女は知っているのか？

「わたし、は」

「どうしてできないんだい？　前に、君は、ぼくの気持ちに伝えてくれたじゃないか。ぼく

のことを、好きだと、いつてくれたじゃないか」

「そんなはずはないわ、そんなはずはないの。だって、あの子は。あの子は、司祭さまが遠くへ  
追いついてしまったはずじゃない！」

女の手から錘が滑り落ち、床を転がる。転がっていた錘は、女の傍に歩み寄っていた男  
の足に当たり、停まった。

「どうした？」

その佇まいから察することは困難だったが、気遣いが、男の声には滲んでいた。

「なんでもないわ」

両腕で己を抱きすくめ、無理に息を整えながら、女は床を見つめる。

「なんでもないの」

緩慢に面を上げた女は、己を見つめている夫に、ぎこちなく笑ってみせた。

次の日も、女は糸を紡いでいた。

小箱は麻袋に入れられ、何重にも縄で縛られ、家の隅に置かれていたが、突然に騒ぎ出  
したりすることはなかった。

女は糸を紡ぐ。細く細く糸を繕り、間断なく錘は回る。

同じ動作を繰り返すうちに、やがて、女は夢に溺れてゆく。

わたしは手をつないでいた。

誰かと手をつないで、暗く、足場の悪い道を、走っているようだった。

何かから逃げているのか、何かに追われているのかは判らない。ただ、わたしが手をひいている誰かの、怯えと焦躁だけは伝わってきたから、その感情だけは、確かなことなのだろう。

ここは森だろうか。樫やエニシダが、月光ですら貫けないほどに、密に生い茂っている。夜であることだけは確かな森だ。

どうして、わたしはこんなところにいるのだろう。どうして、わたしは誰かのひいて走っているのだろう。そもそも、わたしは漁師の夫の帰りを待ちながら、家で糸を紡いでいたはずではなかったか。

絡み合う枝葉の下を走るわたしたちの姿を、樹木の切れ目から射しこんだ月光が、一瞬だけ浮き彫りにする。

わたしが手をひいているのは、十五をこえた程の、長い赤の髪をひとつに束ねた、愛らしい少女だった。そして、ちらりとだけ月光に濡らされたわたしの手は、すべらかな肌で、骨ばった、指の長い手だった。

\*

わたしは愕然とする。

これは、男のひとの手だ。

目線を落とそうとして、それができないことに気がついた。そういえば、これだけ森が深いのに、草の匂いも土の匂いもしない。握っているはずの少女の手はやわらかいのであろうに、感触など微塵もなかった。

そして、もうひとつ、気がついた。

こんなにも走り続けているというのに、息苦しくも、脇腹が痛くも、ない。わたしの目であるところの肉体が息を弾ませているにもかかわらず、だ。

これはどういうことなのか。

「休憩しよう」

それは、青年の声だった。肩で息をしながら、気遣わしげに、少女を抱きよせる。少女の目に映っていたのは、細身の、修道士だった。喘ぐように息を吸い、少女を抱いたまま、青年は苔むした岩に背をあずけた。

「ここまでくれば、だいじょうぶ？」

「いや、まだ、修道院の敷地内だ」

「じゃあ、はやく、もつと、遠くに」

「そうだな。もつと、もつと、ずつと、遠くへ」

少女の指先が、青年の背凭れとなっている岩に伸びた。

「これ、石像だわ」

青年の唇が歪む。

「異教の英雄の像、だよ。我々にとっては石屑同然のものだ」

「でも、あなたは、これを石屑と見なすものを棄てて、わたしと一緒にいようとしてくれているのでしょうか？」

大きな目が、青年のそれをのぞきこむ。青年は眼を逸らし、視界の隅にちらついた灯へとそれを転じた。森の樹木の上、夜空の下に聳え立つその建造物は、教会か修道院であるようだった。

それらの領域の常として、創造主の威光に裏づけられているがゆえに、昼も夜も灯が絶えることはなかったが、踊るようにゆらめく灯は、どこか、翳っているように見えた。

「後悔、してる？」

舌先でとろけるような声が、青年の耳朶を打った。

「苦しみこそが、すべてから、わたしたちを救ってくれるのよ。そう教えてくれたのはあなたじゃない」

強張った腕に絡まったまま、聖女のように高潔で、淡くひかるような微笑を、少女の唇はかたちづくった。

「あなたは、誰かのための苦しみを、悦びと涙することができるのではなかったの？ あなたは、誰かに見放されてしまうことを、救うことができるのではなかったの？ それとも、



報われることを望んでいるの？ 認められることを望んでいるの？ 忘れられることが我慢ならないの？ 同情してほしいの？ 理解してほしいの？ 好意がほしいの？ 愛してほしいの？ 誰でもいいから、心を寄せて欲しいの？」

くすり、と、少女はわらった。

「滑稽だわ」

石の腕が、青年の背中から伸びた。軌跡の残滓に燐光を撒きながら、赤の髪がたなびく。青年は瞠目し、一歩だけ離れたところに立つ少女に腕を伸ばした。微笑む少女の胸の先を、青年の指先がかかる。

青年が石屑と呼んだ像は、その腕をもって修道士を絡め取り、その石の胸に異教徒を埋めていく。

「これからだけを、信じていればよかったのに」

微笑む少女の目の前で、動き出した像の重みに地が軋み、陥没と崩落の土砂に、石像は夜空を仰ぎながら沈んでゆく。

\*

潮の香が意識をくすぐった。

臉をこじあけると、目の前に彼女の顔があった。この世のひかりそのものであるかのよう

な目が僕を見つめている。

ここは僕の部屋で、僕のベッドで、灰色の街で、彼女は世界の彩りだ。

「夢を見ていたよ。漁師の妻になつたり、駆け落ちする修道士になつたりしたんだ。どうしてそんな夢を見たんだろうね」

薔薇の蕾めいた唇が、かすかに動いた。意識のほどんどを眠りの世界に置き去りにしたままであることは自覚していたけれど、それでも、微笑みをうかべてしまう。

「うん、そうだね。これでまた、詩がうみだせそうだ」

気怠さに負けて、瞼を落とす。

「もうちよつとだけ、眠ることにするよ」

スプリングが軋んだ。やわらかくあまやかな唇の感触が、首筋にひろがる。

そうして僕は、再び、夢の海へと沈んでいった。



引越しの数日前、新聞を広げていた私は、そこにあつた記事に目をしばたいた。  
引越しの前日、書類確認等を済ませ、これから住む部屋の鍵を受け取った私に、不動産屋は渋い顔をした。

「どうやら、相当、衰弱していたらしいですよ。お客さんと物件を見に行つてから、ひと月

も経っていないのに。あの時はそんな風には見えなかったんですが」

引越しの日、様子を見てくれた大家に、つい、訊いてしまった。

「あの、お隣の詩人さんは？」

すると、大家は隣の部屋の扉を見つめ、やるせなさそうにかぶりを振ってみせた。

「あの青年はね、きつと、妖精に連れられて、どこかへ行ってしまったのさ」

《了》

# あとがき

みたいななにか

お初にお目にかかりますな方も、いつもお世話になっておりますな方も、こちら手にしていただきまして、ありがとうございます。小説(と、おこがましくも便宜上呼んでみちゃう、フィクションという名のファンタジーな文字列)メインな個人サークル、片足靴屋/Sheagh sidheの中の人、南風野と申します。

載つける場所としてはながかきみたいな感じなのですが、この後の頁は当方の発行物リストやらお試し読み用の文字列やらなので、とりあえずここに。

お部屋探し中の男が詩人とすれちがうだけという、ものすご地味なはなしなんです、入れ子な夢というのをやってみたくて、こんなことになりました。予想通り、地味なものができあがりました。

副題のLeanan-Sidhe(リヤナン-シー)というのは、某ゲームやらなんやらで耳にしたことのある方も多いと思うのですが、妖精の恋人、という意味だそうです。つまるところそんなはなしです。

ここまでお付き合いいただきまして、ありがとうございました。

のたのた書き散らかしてる輩ですが、もしよろしければ、サイトでものぞいてやってください。ではでは、乱文失礼いたしましたー。

南風野さきは

## 片足靴屋/Sheagh sidhe 発行物目録

・『TIERRA DE NADIE 1』

頒布開始:2009/10/11\_A6(文庫)判/デジタルレーザー印刷/132P(含表紙)/¥600

・『TIERRA DE NADIE 2』

頒布開始:2011/05/05\_A6(文庫)判/デジタルレーザー印刷/116P/¥600

・『TIERRA DE NADIE 3』

頒布開始:2011/10/30\_A6(文庫)判/デジタルレーザー印刷/132P/¥600

・『TIERRA DE NADIE 4』

頒布開始:2012/11/18\_A6(文庫)判/デジタルレーザー印刷/130P/¥600

・『TIERRA DE NADIE 短篇集』

頒布開始:2012/06/24\_A6(文庫)判/デジタルレーザー印刷/イラスト有り/50P/¥300

・『夜に舞う、淡き燐光の白い花びら』

頒布開始:2010/11/14\_A6(文庫)判/デジタルレーザー印刷/50P/¥300

# “TIERRA DE NADIE”

## I

斜陽の帝国に踊る造反劇

“TIERRA DE NADIE/The first act ①”

異世界ファンタジー

第一幕・上巻

序章/第1章/第2章 収録

【次頁より内容見本(本文一部抜粋)】

細く白く、深く黒く透き通った曇天に勢いをもって湧き上がる狼煙が見えた。

遙か遠く、強く冷えた風が運ぶうねりをもつて爆ぜる歓声が聞こえた。

「どうしてラダル氏を止めなかつたのですか？」

海運都市ウエルラムの、中央広場を囲む建築物の中心を成す、聖ルス教会の聖堂。常ならばやわらかな陽光が剣と天秤を象った様々な彩りの色硝子を透かして降り注ぐ。その場所はどこか殺伐としていて、真正面から見上げてくる大きな董色の目はどこまでもまっすぐだった。

この子はとても聡いから、上辺だけの言葉などすぐに見透かしてしまうだろう。

だから私は嘘ではないことを言葉足らずに口走る。

「すべては陛下の御為に」

こちらを見上げたまま鋭くなる董色の目。開け放たれた扉が、閑散とした街並みと、ぼやけた曇天と同じ灰色の海を切り取る。そこから吹きこむ潮の香を孕んだ風が、その鋭い董色の目とは対照的な、感情を抑えた顔を縁取る黒髪を玩ぶ。

ファウストウス暦四二〇年、ノヴェンベルの月の第三〇日。

帝国西部ブランデンブルク伯爵領領都ウエルラムにて、ひとりの司祭に先導された領民が領主邸を襲撃した。火を放たれた厳冬の大きに佇む領主邸は当然のごとく炎上、

領主邸に逗留していた委任統治者イルクリー伯は死亡。後、混乱した都市を纏め上げたウエルラミウム海運商会連合代表ハンスユルゲン・ザリエルが市長として立ち、自由都市となることを宣言。女帝はそれを承認。これによりウエルラミウムの主権はブランドンブルク伯の手より離れた。

聖ルス教会の聴罪司祭フェルナンド・ラダルを指導者とするこの出来事は、それが生じた都市の名を冠し、ウエルラミウムの蜂起と呼ばれることになる。



# “TIERRA DE NADIE”

## II

斜陽の帝国に踊る造反劇

“TIERRA DE NADIE/The first act ②”

西洋中世風味架空戦記

第一幕・中巻

第3章/第4章 収録

【次頁より内容見本(本文一部抜粋)】

立ち昇る湯気に茶の香が咲いた。

丹砂の砂漠の、穏やかな昼下がりが。陽の高い時刻にあつてすら、窓から射しこむ陽の光は、どこか赤らんで見える。

「今頃、国境はどうなっているのでしょうかね」

何かと理由をつけて客人の許に足繁く通うカールトンが、本日何度目かの訪問に呆れ果てている帝国官吏の前で、満足そうに茶を啜った。

「ご心配なさらなくても、総督なら確実に勝利を手にして帰還なさるのではないですか」

「あの方が勝利を欲したことなど、今まで一度たりともありませんよ」

茶を口に運びかけていた官吏は動きを停める。瞬きを繰り返す目に満ちているのは、疑問。

「勝利を欲したことなど、ない？」

「勝利など得なくてもいい。意味づけなど後からいい。あの一線から彼らを一歩たりとも近づけないこと。それが得られるのなら、その他のことは、今は、どうでもいい」

夕焼けの茜とは違う、きらびやかな朱に溢れる砂漠。朱金に溺れる街を、カールトンは窓の外に見る。

「この度の国境でのアレスとの衝突においてあの方が渴望するのは、勝利ではなく、きつと、そういったものです。目的に付随する結果としての勝利であるなら、あの方は、その有用性を理解しているがゆえにその使い道を考えるでしょう。しかし、目的を阻害する勝利

であるのなら、苦笑をもって迎えるでしょうね」

絶句する官吏に、カールトンは微笑んでみせる。

「勝ちますよ」

自信に溢れた断言に、官吏は声を押し出した。

「勝つ、のですか？」

「ええ、必ず。この戦いにおける勝利の意味は、帝国にとつての勝利は、国境線を守ること。

アレス勢をアルバグランド山脈の向こう側へ押し戻し、一時的にはあつても、帝国へ楯突

く気概を挫くこと。ゆえに、この度の戦いは、誰の目にも明らかな勝利を得なければ意味が

ない」

官吏の顔から表情が消えた。

「その、意味することとは、何なのです？」

微笑を崩すことなく、カールトンは答える。

「叩き潰すということですよ。完膚なきまでに、徹底的に。壊滅させるといふなどという言

葉では足りないほどの攻撃をもって、一兵たりとも残さずに」

「降伏してきた場合は？」

「おそらくは、降伏など、する暇は与えません」

「それは間違っている！」

だん、と、鈍い音が響いた。

「そんなものは殺戮でしかない」

卓に両手をつき、腰を浮かせ、官吏はカールトンに詰め寄る。カールトンは泰然と官吏を見返した。

「正しくはないのでしよう。ですが、間違っているわけでもない。目的はそれ即ち大義。我々は、大義なくしては、武器を取ることはおろか動くこともできない。そして、我々に大義を下賜し、行動の正当性を与えるのが、他でもない、陛下」

官吏は押し殺した声で問う。

「脅し、ですか？」

物静かな蒼の目は、官吏を見据えたまま、問いに答えることはない。

「我々に為せないことは貴方がたが為せる。貴方がたに為せないことは我々が為せる。我々が欲するのは帝国の安寧。その実現に資することこそが我々の存在意義。ですが、そう簡単に鞘から抜かれることはない。過去の蓄積、これから育まれるであろうもの。時間も金も、生命も願望も可能性も、我々はすべてを消費する。ここで費やされるものは、現在におけるものだけではない。ここで費やされるものは、現在をつくりあげた過去と、これから迎えることができたであろう未来。ですが、それらと引き換えにしても護らねばならない現在のために我々は存在する。我々は、その手段としての、剣」

そこでカールトンは瞼を落とす。

「その我々が鞘から抜かれたことの意味」

砂漠に満ちるあたたかな色彩。それを孕む陽光の、あたたかさよりも苛烈さが先立つ冷ややかな光沢。

「貴方、よくご存じでしょう？」

再び朱金に曝されたカールトンの蒼の目には、真昼を濡らす残酷な太陽の朱が宿っていた。

# “TIERRA DE NADIE”

## III

斜陽の帝国に踊る造反劇

“TIERRA DE NADIE/The first act ③”

西洋中世風味架空帝国史

第一幕・下巻

第5章/終章 収録

【次頁より内容見本(本文一部抜粋)】

「これはまた侮れんな」

唇に愉悅を滲ませるのは、今しがた味方に撤退を命じた壮年の男。馬上の傭兵は、蒼の目に純粹な喜悅をちらつかせながら、黒煙に混ざる紅蓮を見据えた。

帝都の城壁より放たれた炎は、吸いつくように地を舐めながら丘を下り、乾いた大気と乾いた枯れ草を巻きこみながら、踊るように渦を巻いて、曇天のぼやけた薄闇を駆逐する。撒かれた油に引火した炎は、更にその熱を盛んにさせ、燻る熱を載せたまま丘を下った。

こうなつては、いかに帝国に名を馳せる傭兵隊とはいえ、逆巻く陽炎と黒煙に咳きこみながら後退するしかない。

「さて、高い報酬となるか安い報酬となるか」

黒煙に囁む城門を遠目に眺めながら、面白い玩具を見つけた子どものような笑みを、イングベルトは唇に描かせる。

頭上に広がるのは曇天、地を満たすのは灰の薄闇。透きとおった陽炎に煤が躍り、瀑布にも似た炎が燃え盛った。天を指して踊り狂う深紅は城壁を撫で焦がし、橙から紅へ、紅から黄の強い緑へ、やがて炎は目に鮮やかな紅蓮を呈す。

炎と熱が生み出す深紅に、ぼつりと、漆黒が浮かび上がった。

城門の上、炎に囲まれながら悠然と立つのはひとりの女。城壁の外を見下ろす女の緑髪を、女にとっては追い風となる乾いた強風が弄ぶ。

ゆるく、女の朱唇が優美な弧を描いた。

炎とともに渦巻く、一時の危機を回避したことの歓喜も、それによって蹂躪されたものの怨嗟も、畏怖も賞賛も、恐怖も罵倒も、そのすべてを受けとめ、風に散るだけの髪を無造作に押さえながら、女は小首を傾げる。

炎に後退した傭兵に向けられた女の目に、凍てつく冬空のごとく張り詰めた、どこまでも冷ややかな怜悧さが浮かんだ。

「まったく、侮れんな」

遠く、城門の上で無防備に姿を曝す女帝を目の当たりにしたイングベルトは、驚嘆の息を吐く。

「本当に、侮れんよ」

女帝は、その時、小さく微笑したようだった。



# “TIERRA DE NADIE”

## IV

爛熟の帝国に踊る革命劇

“TIERRA DE NADIE/The second act ①”

西洋中世風味ファンタジー

第二幕・上巻

序章/第1章/第2章 収録

【次頁より内容見本(本文一部抜粋)】

黒の大窓が聳え立つその場所には、夜の闇が滲み、ゆらめく燭火が椅子に座る男の単眼鏡に踊る。

「気づけば取り残されてしまったようだね」

窓際に佇む銀髪の青年が、夜に融かしていたその気配をわずかに押し出した。

「君についてもあの青年から預かった言葉がありはするのだが」

ゆらめく燭火にその身を与えながら、男は組んだ指で口許を覆う。

「アクイレシアの件については、正直、腑に落ちない」

闇を見据えるその目はひどく鋭く、燭火のちらつくその蒼は、すべてを呑んだ上で静謐を呈する夜の漆黒に近い。

「腑に落ちないが、そんなことはどうでもいいとも言える。だが、公爵家の連中が次に潰しにかかるとしたら、それは選帝侯たる我々だ。そして、我が身は何よりも可愛いもの。」

「私に足許を掬われる趣味はないし、斃れてやる義理もない」

そこで男は首を擡げ、背後を見遣るように首を巡らせて、悠然とした笑みを浮かべながら青年を見据えた。

「ここに来た大司教も君には触れなかった。それが彼の意思によるものなのか他の者の意思によるものかは別として、あの青年の片腕として、知ってはならないことまで知っているであろう君を放置するなどとは、不用心にもほどがある」

愉しげに紡がれるのは、どこか含みのある言葉。

「君の行きたいところには、どこへでも行けるよう、手配しよう」

単眼鏡の奥の蒼に宿るのは不敵の色。

「休暇など、取ったらどうだね」

「随分と都合のいい」

遠慮のない青年に、男は楽しげに声を上げて笑う。

「生き延びること、血を繋ぐこと。それば、生まれ落ちてより土地と人を負っている我々の義務であり、責務だ。そのためになら、いくらでも狡く姑息に生きてみせるさ」

面白がるような声を響かせながら、男は口許にたゆたう笑みを深くした。

# “TIERRA DE NADIE”

## 短篇集

### 爛熟の帝国に踊る群像劇

帝国のどこか、帝国のいつか。彼らが見ていたちいさな出来事。

こちら単体でいけます/本編ほぼ関係ありません/イラストあり

- 第一篇 ちよっとだけ明かされた真実の話
- 第二篇 侯爵令讓と薔薇の話
- 第三篇 いつかの彼らの話
- 第四篇 野心家一家の話
- 第五篇 騎士と従騎士と占い師の話
- 第六篇 ささやかな秘密の話
- 第七篇 嘘をこいねがう話

〈全七話収録〉

【次頁より内容見本(本文一部抜粋)】

あれは、私が十歳になったかならないかくらいのことだったと思う。父に連れられて行った、バヴァリアのアクイレイア邸。その一室で、アクイレイア公ガイウスに促されて私の前に立ったのは、金に近い茶の髪の、屈託のない笑顔を持つ少年だった。後に、みつづ年上だと知ったその少年を示して、父は私に笑いかける。

「マイウス・アクイレイア。ガイウスの第二子だ。君の夫になる者だよ」

そうやって引き合わされた婚約者は、ほどなくして、私にこんなことを言った。

「この度、大陸の東方を遊学することになりました」

サヴリナまで足を運んでくれたマイウスが、卓の向こうから、晴れた日の蒼穹みたいな目で、まっすぐに私を見つめてくる。

「すぐに帰ってきます。それに、周囲の眼が薄れ、好きに跳ね回る絶好の機会ですから、ここぞとばかりにはしゃいできますよ。貴女に会えなくなるのは淋しいですが、遊学先より手紙を送ります。私がいなくとも、よろしければ、バヴァリアに遊びにいらしてください。父母が喜ぶますから。兄弟やセシリア様も」

そして、恥ずかしそうに彼は微笑んだ。

「またお会いしましょう、アルシエティナ」

精悍できらきらしく、爛漫で思慮深い。

あのひとほど、後にも先にも、太陽に祝福されているひとはいなかった。

あの時ほど、突然という形容を思い知ったことはない。

「ガイウスの第二子だ」

そう言つて父が紹介してきたのは、亜麻色の髪的少年だった。父の傍らに立つその少年は、戸惑っているようにも居心地が悪そうにも、後ろめたさを覚えているようにも、罪悪感に蝕まれているようにも見えた。

佇む以外に物を知らないようなその少年は、名をウォルセヌスといった。



# 夜

に舞う、

淡き  
燐光の  
白い  
花びら

くろ  
緇は云う。

花を、華を

選定なる確定を

これは、少年王が生まれる物語

中華風味無国籍アジア幻想譚

《収録》

・『夜に舞う、淡き燐光の白い花びら』

・『彩華』

【次頁より内容見本(本文一部抜粋)】

次に霧が立っていたのは、岩だらけの沢の、大きな巖の上だった。  
「ほう、鬼か」

巖の上に座りこみ、清流に釣糸を垂らしていた矮躯の翁が愉快そうに目を細めた。罎褸に近い布を無造作に纏っているだけの禿頭のその翁は、口が埋もれている真つ白な長い鬚と真つ白な長い眉毛を持っていた。

樹々に両端を挟まれている清流のところどころで白い霧がわだかまっている。水気を孕んだ空気はまろく、ほのかに鼻腔をくすぐる水の香は甘い。

「俺は鬼じゃないんだが」

「それは珍しいな。水鏡のこちら側には鬼しかおらんのだが」

「どういうことだ？」

「言葉のまま。そういうことさ」

真つ白な眉の下の目を細め、翁は笑ったようだった。

「お主は儂らと同類ではないらしい。お主の時は未だ鎖されてはいない」

首を傾げる霧を翁は横目で見遣った。

「お主の時は、逆流することも激むこともなく、明確な方向性をもって、一方に流れておる。それこそ水が高いところから低いところに流れるがごとく、一方に。たったそれだけのことで、お主は儂らとは違うのさ」

樹々のざわめきと清流のせせらぎが澄んだ大気に滲み渡ってゆく。



漆黒の宙空に燐光が湧いた。闇を透かしながら現れた蕾が、その軌跡に燐光を撒きながら、震えるように咲いてゆく。ひとつの蕾が咲き誇るとともに、そこに地が在るかのよう<sup>に</sup>に幾つもの蕾が立ち現れ、数多の蕾が花ひらいてゆく。

その絢爛の最中に、ある色彩が浮かびあがった。そこに現われた緋という彩りは次第に衣のかたちを呈し、やがては緋衣を纏った淡い褐色の肌の女がそこに佇む。宙空に平面をつくる花に覆われた足許を、女は濃藍の目で見つめていた。

女の眼の先、可憐な花が咲き乱れる宙空。そこに、ひとりの男が花に埋もれながら横たわっていた。若いことだけを特徴とするその男は、慈しむような女の眼の先で、寝息を立てることもなく眠っていた。

「満足か？」

と、女が問う。当然、男の返答は無い。

「花は見れたか？」

と、女が問う。当然、男の返答は無い。

投げかけられるだけの問いが、残響となつて、咲き誇る花の上に舞い落ちていった。

「檻に囚われたのはどちらか、お気づきなのではないですか？」  
「とりあえぬ、生きてはいるようですが、死んでくれるのなら」  
「こういう護られ方は、怒るんじゃないかな」  
「俺が君の傍にいるのは、ちょっとしたお遊びとしたら、報酬は？」  
「素直すぎて、仰せのままに、我が主、いくら「石は投じてみるものですよ」  
「僕は、あの潔癖な少年の相棒は君だと思ってたんだけど」  
「秘蔵の林檎酒を一本」  
「貴女も馬鹿ですね」

# “TIERRA DE NADIE”

## V

### 爛熟の帝国に踊る革命劇

“TIERRA DE NADIE/The second act ②”

西洋中世風味架空帝国譚

### 第二幕・下巻

第3章/第4章/終章 収録

2014年発行予定

——さあ、我らの舞台の幕開けといこう——



詩人のはなし ～ The tale of a Leanan-Sidhe ～

片足靴屋/Sheagh sidhe発行物目録&試し読みサンプル

著(描) : 南風野さきは

発行 : 片足靴屋/Sheagh sidhe

発行年月日: 2013/05/05

初出 : 片足靴屋/Leith bhrogan

URL: <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

\* 著作権は著者に帰属いたします。

\* この物語はフィクションであり、実在の人物・団体・事件等には一切関係ありません。

詩人のはなし (+ 発行物目録&サンプル)

<http://p.booklog.jp/book/71079>

著者：片足靴屋/Sheagh sidhe

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/leithbhrogan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/71079>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71079>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ